

ネットワーク情報学部生の学外展示会
コウサ展2010
 ・テーマ・
—陽庭(はるにわ)—
 (開 催 日 時)
 2010年1月30日(土曜11:30~19:00)
 31日(日曜11:30~18:00)
 ※入場は終了30分前まで
 (会 場)
 BankART Studio NYK -iF NYK ホール
 (ア ク セ ス)
 (横浜)みなとみらい線「馬車道駅」6番出口(万国橋口)より徒歩4分
 ・詳細はコウサ展ホームページでご確認ください。
 http://www.ne.senshu-u.ac.jp/~kousa2010/



経済学部(学外特別研修)



経営学部(企業研修)



商学部(インターンシップ)

企業での就業体験を通し、その後の学習目標の設定や将来の就職に向けた指針となるインターンシップの報告会が3学部で開かれた。

経済学部は12月12日に29組36人が、経営学部が12月1日に13組17人が、商学部は11月17日に9人がそれぞれ個人、

グループでの研修成果を発表。最後に指導教員からの講評と、研修を受け入れてくれた企業や団体等の関係者が、社会人としてのアドバイスと励ましの言葉を贈るなど充実した報告会となった。

経済・経営・商学部で インターンシップ発表会

ネットワーク情報学部 プロジェクト発表会



▲「遊びにおける発見性に着目したコンテンツ開発」(上平崇仁プロジェクト)



▲「げったんステーション~2009年、英語学習は敵から味方に寝返るでござる」(神白哲史プロジェクト)



▲「趣味の輪を広げる環境を作り、アクティブシニアのライフスタイルを広げよう」(望月俊男プロジェクト)

ネットワーク情報学部3年次必修の「プロジェクト」は、学生主体でテーマを決め、グループワークで、「情報」を社会の諸課題解決に生かそうと1年間取り組む。12月12日、生田キャンパスで、取り組んだ努力の成果を披露する発表会が開かれ、受験生や地域の方々などに説明した。

プロジェクトから卒業制作へ

「遊びにおける発見性に着目したコンテンツ開発」(上平崇仁プロジェクト)より、健康福祉局から、「食育」に関するCM制作の依頼を受けた。山崎由美



▲市の担当者と打ち合わせる宇佐美さん

「映像のまち・かわさき」の専属マスコットキャラクター「かわさきマチ」の制作で、「かわさきマチ」を使ったコンテンツを制作し、市のPRに活用してもらおうと企画していたところ、健康福祉局から、「食育」に関するCM制作の依頼を受けた。山崎由美

福富教授プロジェクトとして12月8日、本ほ一人でこなした。「過渡期」に携わった橋本さんは、フォーラムが主催するコンテンツビジネスサロンに第1回からスタッフとして参加している。同教授指導の卒業制作で、映像作家・大学教授など多彩な活躍をする宇川直宏氏の講演会を企画。第5回ビジネスサ

ロンとして12月8日、本ほ一人でこなした。「過渡期」に携わった橋本さんは、フォーラムが主催するコンテンツビジネスサロンに第1回からスタッフとして参加している。同教授指導の卒業制作で、映像作家・大学教授など多彩な活躍をする宇川直宏氏の講演会を企画。第5回ビジネスサ



▲橋本さん(左)、宇川氏(中央)、福富教授(右)

「朝ごはんを食べよう」CMを制作し、描くのは慣れているが担当。専大生パワーを結集して「朝ごはんを食

福富忠和プロジェクトに新しい和菓子を作る」と「フルーツ味」は、新商品開発をテーマに3つの企画を同時進行させた。その一つは、「クレヨン羊羹」の形状を思い

福富忠和プロジェクトに新しい和菓子を作る」と「フルーツ味」は、新商品開発をテーマに3つの企画を同時進行させた。その一つは、「クレヨン羊羹」の形状を思い



▲福富プロジェクトの皆さん

「朝ごはんを食べよう」CMを制作し、描くのは慣れているが担当。専大生パワーを結集して「朝ごはんを食

専大とともに 神田神保町探索



▶店内で原修一社長(右)と佐々木紀久雄さん(左)

大丸屋米店

感謝忘れず...地域に密着

配の九段坂を、リヤカーを引いて配達に励んだ。昨夏亡くなられた先代の順一さんは神保町三丁目町会長を30年間務め、町の発展に尽くした。良質の商品と安定した価格を心がけ、「地域に密着し、感謝の気持ちを忘れずに、と心にとめていきます」と穏やかに語るのは7代目、現社長の修一さん。150年近い伝統を守る。修一社長も同町会の役員を務めており、本学の「校友会ウィーン大学」には、町会長らとともに一昨年参加。「今回は和食とのコラボレーション。堪能しましたよ。」専大の思い出は旧校舎時代にさかのぼる。「校舎への入り口付近は、屋根のある広場になっていて、子どもたちの格好の遊び場でした。探検ごっこをしたり、メンコ遊びをしたり……。大学の方も地元の子どもたちは大目に見てくれていたようです。柔道部や空手部の学生さんたちが練習する姿を見学したのも懐かしい思い出です」と語る。番頭さんの佐々木紀久雄さんは1959年、米どころ宮城県古川市(現・大崎市)から集団就職で上京し同店に就職。勤続50年になるベテランだ。「以前は専修大学の学生食堂にも、週に米200kgほどを配達しました」と振り返る。「精米してすぐ、新鮮なうちに配達する。その繰り返しは昔も今も変わりありません。」



▶大丸屋米店の店構え

大丸屋米店(原修一社長)と佐々木紀久雄さん(番頭)のインタビュー。専大の思い出は旧校舎時代にさかのぼる。「校舎への入り口付近は、屋根のある広場になっていて、子どもたちの格好の遊び場でした。探検ごっこをしたり、メンコ遊びをしたり……。大学の方も地元の子どもたちは大目に見てくれていたようです。柔道部や空手部の学生さんたちが練習する姿を見学したのも懐かしい思い出です」と語る。番頭さんの佐々木紀久雄さんは1959年、米どころ宮城県古川市(現・大崎市)から集団就職で上京し同店に就職。勤続50年になるベテランだ。「以前は専修大学の学生食堂にも、週に米200kgほどを配達しました」と振り返る。「精米してすぐ、新鮮なうちに配達する。その繰り返しは昔も今も変わりありません。」

水大丸屋米店(東京都千代田区神田神保町3-6) 03(3261)7144